

『新宮撰歌合』注釈

武田元治

『新宮撰歌合』は、建仁元年(一一〇一)三月二十九日、新造の二条院御所で催された後鳥羽院主宰の十題三十六番の撰歌合である。

その成立を見るまでの経過は、『明月記』にも記されるが、後鳥羽院の示した歌題十題について、左右の歌人各十三人が詠んだ歌を、左右各三十六首に絞って結番している。ただ題ごとに採る歌の数を決めなかったために、異題の歌の結番される事例が生じている。

歌合当日の方人たちの発言は、活発に行われたらしい。最終的には判者の積阿(俊成)が判定しているが、当座のことでもあり、その見解は簡単な場合が多い。これらの批評を記録したのは、定家と見られる。

ここでは、貞享二年刊歌合部類本を底本とする『新編国歌大観』の本文によらせていただき、解釈を試みる。ただし句読点や返り点は、私見によって新しく付した。

新宮撰歌合 建仁元年
三月二十九日 作者隠名褒貶

題

霞隔遠樹 羈中見花 雨後郭公 松下晚涼 山家秋月 湖上曉霧 嵐
吹寒草 雪似白雲 遇不逢恋 寄神祇祝

『新宮撰歌合』注釈

左方

左大臣後京極良経 内大臣通親 権大納言公繼 积阿越前嘉陽門院官女 散位

隆信 左近衛中将通具 散位有家 散位保季 上総介家隆 寂蓮 鴨

長明禰宜鴨長継男 賀茂季保

右方

女房後鳥羽院 前権僧正慈円 権大納言忠良 権中納言兼宗 参議公経

太宰大式範光 宮内卿後鳥羽院官女師光女 讃岐二条院官女頼政女 丹後宜秋門院官女

頼行女 左近衛権中将定家 左近衛権少将雅経 左兵衛佐具親 右馬助

家長

読師 左方 左近衛中将通具

右方 参議公経

講師 左方 上総介家隆

右方 左近衛権少将雅経

判者 皇太后宮大夫入道积阿

一番 霞隔遠樹 左持 内大臣

1 もえ出づるこずゑは峰の草葉にて野への煙とたつ霞かな 女房

右 浦の松のいろやまさると春見れば霞ぞたてるしがのから崎

2

左歌を、右方に申云、みねの梢を草葉と見て、野べのけぶりと霞をまがへたる心、上下たがひてや聞ゆらん。左方陳申云、まことに峰を野べと見るにはあらず、眺望のころには詩などにもつねにいひならへる事なり。右歌を左方ことに申す旨なし。判者申云、左歌右難申旨もふかき難にはあらず。右歌、すがた心におもし。但かつは一番の左歌なれば、持とすべし。

【通釈】

一番 霞隔遠樹 左持

内大臣

1 芽吹くこずえは、峰で、草葉とも見えて、野辺の煙そのままに、霞がたなびいている。

右

女房

2 浦の松の色も、春、ひとしお勝るかと思渡すと、志賀の唐崎は霞が立ちこめていた。

左の歌を、右方では、「峰のこずえを草葉と見て、野辺の煙と霞を見まがえた心は、上下の句が適合していないと見えるだろうか」と批判した。それに対して左方は、「本当に峰を野辺と見たのではなく、眺望の心の場合、漢詩などでも常にそう詠みならわしていることだ」と釈明した。右の歌については、左方が特に批判するところはなかった。

判者が言うには、——左歌に関して右方が非難して言うことは、必ずしも根本に触れた非難ではない。右歌は、姿も心も殊に面白い。ただ別の面から言えば、対するのは一番の左歌だから、持としよう。

【注】○もえ出づる 萌え出づる。芽が出る意だが、ここでは「萌え」に同音の「燃え」を響かせ、後の「煙」と縁語の関係を作る。○しがのから崎 志賀の唐崎。近江の国の歌枕。琵琶湖西南岸の崎で、今は大津市に所屬。

【考察】左右の歌は、いずれも題の「霞隔遠樹」の心に沿って風景を詠むが、左の歌は、遠くの峰の「萌え出づるこずえ」が「草葉」と見え、

それを覆う霞が「野辺の煙」と見える情景に仕立てる。峰の霞の風景の表現に、春の野焼きのイメージを用いた作であろう。

右の歌は、浦の「松の色やまさると春見れば」、志賀の唐崎は「霞ぞ立てる」と、霞が松を覆っていた由を詠む。この上句は、次の源宗于の歌によったかと思われる。

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり（寛平御時后宮歌合）三九、『古今集』二四、源宗于）
また下句は、次の藤原頼輔の歌あたりの影響を受けているかもしれない。

春くれば杉のしるしも見えぬかな霞ぞ立てる三輪の山もと（『千載集』一〇、藤原頼輔）

しかし右歌は、そういう先行作の影響があつたとしても、作者なりの心を示して、のびやかに詠まれているかと思われる。（作者は「女房」と記されているが、後鳥羽院である。）

左歌に対する右方の批判は、「上下たがひてや聞きゆらん」ということであつたと記される。これは具体的にどんな点を指すのか、必ずしも明らかでないようでもある。しかし左方の釈明によれば、峰の様子を野辺の様子に見立てた点に違和感があると指摘したのであるうか。

ただ釈阿（俊成）の批評では、この左歌への批判は「深き難にはあらず」と見ている。一方、右歌は「姿心におもしろし」と評価しているが、一番左歌は負にしないという歌合の伝統的な判定基準をもち出し、持とする。

二番 左持

左大臣

3 ながめこし沖つ浪まのはまひさぎひさしく見せぬ春霞かな
右 参議公経

4 たかせさす六田の淀の柳原みどりもふかく霞むはるかな
左歌を右申云、上にながめこしとおきて、下に見せぬといへる、同心の病かいか。右歌を左申云、たかせさすむつだのよどとは、

いづこと思へるにか。六田の淀とはよしの川とこそ万葉集にもよみたれ、柳はらむつだの淀に証歌の侍るにや、おぼつかなし。右陳申云、六田のよどの柳、古歌よみならはして侍るにや。左猶証歌を可_レ申之由申。判者申云、左歌すがたよろしけれども、ながめの詞うたがひ有り。右歌、むつだの淀おほつかなし。又持とすべし。

【通釈】

二番 左持

左大臣

3 いつも眺めてきた、沖の波間の浜ひさぎを、久しく隠して見せない、春の霞よ。

右

参議公経

4 舟が浅瀬に棹さして行く、六田の淀の辺り、柳原の、緑も深く霞みわたる春よ。

左の歌を、右方は「上の句に『眺めこし』と言って、下の句に『見せぬ』と言ったのは、同心の病かと思うが、どうか」と批判した。

一方、右の歌を、左方は「高瀬さす六田の淀」とは、どこかと思つて詠んだのだろうか。六田の淀は吉野川として『万葉集』にも詠んだ例があるが、柳原を六田の淀に続けた証歌があるでしょうか、疑わしい」と批判した。それに対して右方は、「六田の淀の柳は、古歌に詠みならわしているかと思ひます」と釈明した。しかし左方はなお、証歌を挙げよと追及した。

判者が言うには、——左歌は姿は結構だと思ひけれども、「ながめ」の言葉を用いたのは疑問がある。右歌は、「六田の淀」に関して疑問が残る。この勝負も持としよう。

【注】

○はまひさぎ 浜柳。浜辺に生えるヒサギ。ヒサギは、キササゲ

またはアカメガシワの異名。ともに落葉高木。○たかせさす 高瀬さす。浅瀬に棹さして舟が行く。○六田の淀 むつたのよど。大和の国の歌枕。今の奈良県の吉野町の六田の辺りを流れる吉野川の淀。○みどりもふかく霞む 季吟『八代集抄』に「柳の緑も深く、霞も深き景

気なるべし」と注する。これを宣長『美濃の家づと』では「霞の深くは、いかでか緑の深きは見えん」などと批判している。しかし「あさ緑花も一つに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月」(『新古今集』五六、菅原孝標女)の歌などでは、霞は緑色とされるので、それが遠くの柳の緑と重なって、色濃く見える様子なのであろう。(霞の色の緑については、漢語「翠霞」を参照する説もある。)○同心の病 一首の中に同様の意味をもつ語が用いられている場合、これを歌病として言う。『俊頼髓脳』では、「文字は変りたれども、心ばへの同じきなり」と説明し、「山桜さきぬる時はつねよりも峰の白雲たちまさりけり」という歌の場合、「山」と「峰」がこれに当たるとする。

【考察】左右の歌は、前の一番と同様、ともに「霞隔遠樹」の題に応じて詠まれているが、左の歌は、見なれた「沖つ浪間の浜ひさぎ」を、「春霞」が久しく隠して見せないと詠む。これは次の『万葉集』の歌による作であらう。

波の間ゆ見ゆる小島の浜ひさぎ久しくなりぬ君に逢はずして(『万葉集』二七六三)

左歌は、この万葉の歌の序詞の部分を実景として生かす一方、「浜ひさぎ、ひさしく」と続く声調の快さは残しながら、「久しく見せぬ春霞かな」と、霞の歌に仕立てている。

右の歌は、「六田の淀の柳原」が「みどりも深く霞む春かな」と詠む。この六田の柳は、次の『万葉集』の歌あたりから採って詠み入れたものであろう。

かはづ鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ川かも(『万葉集』一七三三)

右歌は、この柳が「緑も深く霞む」春の姿を描いている。これは「注」で触れたように、柳の緑が前面の霞の緑と重なって色濃く見える様子を表わしたかと思われる。

左右の歌に対する方人たちの批判を見ると、左歌に対しては、「ながめ」と「見せ」との重なりに関して「同心の病」が指摘され、右歌に

対しては、「六田の淀」に「柳原」を結びつけた点が疑問視され、証歌が求められている。

俊成の批評は、左歌の姿を「よろし」と評価する外は、方人たちの批判を肯定するにとどまるようである。しかし当座の判となれば、これは自然なことだったのであろう。

【備考】二番右歌は、『新古今集』（七二）に収められている。

三番 左

寂蓮

5 末とほき松のみどりはうづもれて霞ぞ浪にうきしまが原

右勝

左近衛権少将定家

6 みつしほにかくれぬ磯の松の葉も見らくすくなく霞む春かな

左歌を右申して云、末とほきとおけるより、すべてききよからぬにや。右歌を左申云、松の葉こそあまりにくはしくきこゆれ。判者申云、見らくなどいへる詞は、ふるき事なればよろしくも聞こえねども、末遠きといへるにはまさるべくや。

【通釈】

三番 左

寂蓮

5 末はるかに続く、松の緑は覆われて、霞がかかり、波に浮かぶと見える浮島が原よ。

右勝

左近衛権少将定家

6 満ちる潮には隠れない、磯の松の葉も、目にすることが少なく、霞んでいる春よ。

左の歌を、右方は、「末とほき」と詠んだ初句を初め、全体として聞きよくない歌だろうか」と批判した。右の歌を、左方は、「松の葉」とまで言うのは、詳しく言い過ぎたと思われ」と批判した。

判者が言うには、——（右の）「見らく」などといった言葉は、古く用いられた言葉なので、あまりよいとも思われませんが、（左の）「末遠き」と言ったのに比べると、勝るだろうかと思つ。

【注】○うきしまが原 浮島が原。駿河の国の歌枕。今の静岡県の沼津市から富士市にかけての、愛鷹山と駿河湾の間の細長い低湿地。○見らく「見る」のク語法。見ること。『万葉集』（九一八など）に用例がある。

【考察】左右の歌は、ともに「霞隔遠樹」の題で詠まれているが、左の歌は、浮島が原で松の緑が霞に包まれて、波に浮かぶ島と見えると詠む。その風景を示すのに「浮島が原」の名を用いている。

右の歌は、満ち潮には隠れない「磯の松」の葉も、「見らくすくなく」霞む春景色を詠む。これは次の古歌（『万葉集』の作者末詳歌）を本歌として詠んだと思われる。

潮みてば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく恋ふらくの多き（『万葉集』一三九八『拾遺集』九六七、坂上郎女）

方人の批判は、左歌に対しては、初句「末遠き」以下全体に「聞きよからぬ」ことが指摘される。右歌に対しては、松の「葉」まで詠むのは細か過ぎると批判される。

俊成の批評は、右歌の用語について、「見らく」などの古語の使用はよいとは思われないが、左歌の「末遠き」に比べると勝ると言い、右の勝としている。

俊成はここで、左歌の「末遠き」を「見らく」に劣る用語とする。理由は別に記していないが、右の方人が「末遠き」以下歌全体を「聞きよからぬ」と指摘しているの、それを受けたものと思われる。では「聞きよからぬ」とは、具体的にはどんな点を言うのか。歌合の判詞でこの評語を用いた前例は少ないが、その一つは、『夫木抄』（一五〇一九）に、

久安五年七月山路歌合、雪 西念法師

雪ふかき谷のはふやに朝ほらけあけぞわづらふしばのくみがき

此歌判者顕輔云、右歌はふやなど詠める、ききよからずと云云。と、現存しない久安五年七月『山路歌合』から引用する形で残された場合で、歌に「はふや」と詠んだのが「聞きよからず」とされる。

今一つの前例は、『広田社歌合』海上眺望二十五番右の祐盛の歌、白雲につづくしほちをながむればいづれを波とえこそ見わかぬに對する俊成の判詞に、

つづくしほちをといへる、ききよくしもあらぬにや

とあるもので、歌に「つづくしほちを」と詠んだのだが「聞きよくしもあらぬ」とされている。これらの用例によって見ると、音調の上で滑らかさを欠くと思われる場合に、「聞きよからず」と言われているようである。

左歌の「末とほき」などの語も、そういう音調上の問題がある点で「聞きよからぬ」とされたと見てよいのではないか。そして、当時までの歌は「末遠き」の語を用いたものが少ないが、これも同じ観点から避けられたかと思われる。ところが、後の歌には「末とほき」の類の語が広く用いられるようになる。このことが明らかに知られるのは、勅撰集に見られる用例で、「末とほき」「末とほく」などと詠んだ歌は、『新古今集』に「末とほみ」の一例が見られる外には、八代集を通じて例がないが、『続後撰集』以下には「末とほき」八例、「末とほく」五例が見いだされる。それで、「末とほき」などの語を「聞きよからぬ」ものとして嫌うか否かということは、時代によって見方を異にしたらしい。

【備考】三番右歌は『続古今集』（四四）に収められている。

四番 羈中見花 左持

寂蓮

7 旅の空いく夜の雲にふしなれておもひもわかぬ花の夕陰

右 霞隔遠樹

前権僧正慈円

8 みよし野のやまのはふかし朝がすみこむる梢を雲に任せて

左歌を右申して云、ことなる難なし。剩頗宜歎のよし申云。右歌、左又殊申旨なし。判者申云、左歌のすがた艶にはきこゆれど、殊に花を思へる心すくなきにや。右も又あさ霞こひねがはれぬさまに侍り。持とすべし。

『新撰歌合』注釈

【通釈】

四番 羈中見花 左持

寂蓮

7 旅先で、幾夜も山奥の雲の中に寝慣れていて、夕べの花陰を、それと見分けかねた。

右 霞隔遠樹

前権僧正慈円

8 吉野の山の端に、深く朝霞がかかっている、——包みこんだこずえを、雲に任せて。

左の歌を、右方は、特別な欠点はないと評した。その上、大層結構な作かと思う旨を述べた。右の歌を、左方も別に何か言うところはなかった。

判者が言うには、——左歌の姿は優美には思われるが、特に花を賞美した心はあまり見られないだろうかと思う。右の歌も「朝霞」と詠んだのは望ましくない詠み様と思います。この勝負も持としよう。

【注】○雲にふし 高く深い山で、雲の中に夜を明かす様子を言う。○みよし野のやまのは み吉野の山の端。「吉野の山」は、大和の国の歌枕。今の奈良県吉野郡の山で、今言う吉野山を含む広い山岳地帯の総称であつたらしい。平安時代も中期ごろまでは雪深い地、山岳信仰とも結びついた隠棲の地といったイメージが強かつたようである。花の名所とされるのは主に平安時代後期になつてからのことである。「山の端」は、山の空に接すると見える部分。○剩 あまつさへ。その上。

【考察】四番は左右で題が異なる。これは歌人たちが左右二組に分かれて、それぞれ三十六首を撰んだ際に、題ごとに採る歌の数をそろえなかつた結果、生じたことである。

左の歌は、「羈中見花」の題で、旅の身として幾夜も深い山中の「雲にふしなれ」のため、「花の夕陰」をそれと見分けかねたと詠む。上の句で深い山中に宿ることを「雲にふし」と言い、下の句の花の雲の夕景につないだ着想に、特色を示そうとした作であろう。

右の歌は、三番までと同様、「霞隔遠樹」の題で、吉野の山の端に朝

霞が深い、包むこずえを雲に任せて、と詠む。「吉野の山」「かすみ」「こむる梢」などの用語から見て、一首はあるいは次のような歌を念頭に置いてののかもれない。

吉野山たえず霞のたなびくは人にしられぬ花やさくらん（『拾遺集』三七、中務）

方人の見方は、左歌について右方が「ことなる難なし」とした上に「頗宜歎」と言ったという。また右歌について左方も「殊申旨なし」と記す。共に高く評価したらしい。

俊成の批評は、それを受けた上で主に問題点を挙げている。すなわち左歌に対しては、姿は「艶」ではあるが、題の花を賞美する心が少ない点を指摘し、右歌に対しては「朝霞」の語を問題視する。この「朝霞」の語は『万葉集』に用例が十例ほどあるが、『古今集』から『千載集』に至る勅撰集には見いだすことができない。

五番 鞆中見花 左勝

9 けふも又さくらに宿をかり衣きつつなれゆくはるの山かせ

右 霞隔遠樹

左近衛権少将雅経

10 から錦秋のかた見をたちかへて春はかすみのころもでの森

左歌を右殊に申旨なし。右歌、左申云、春の霞の歌から錦秋のかたみとおける、よしなくや。判者左をもて為勝。

【通釈】

五番 鞆中見花 左勝

左大臣

9 今日もまた、桜に宿を借り、花の衣を着て親しんだ様子で、吹いて行く春の山風よ。

右 霞隔遠樹

左近衛権少将雅経

10 唐錦の、秋の形見の（紅葉の）衣を裁ち替えて、春は霞の袖の姿になる、衣手の森よ。

左の歌について、右方が特に言うことはなかった。右の歌については、左方が、春の霞の歌に「唐錦秋のかたみ」と詠んでいるが、

無意味なことかと思うと指摘した。判者は、左の歌を勝とした。

【注】○宿をかり衣きつつなれゆく「かり衣」は、宿を「借り」に、「狩衣」を掛ける。「かりころも」は「かりぎぬ」と同じで、平安朝貴族の常服なので、「着つつなれゆく」（繰り返し着て萎える意）につながる。この辺りの言葉統きは、「から衣きつつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（『古今集』四一〇、在原業平）を思わせる表現。○から錦 唐錦。大陸から渡来した錦。紅色のまじる模様があり、紅葉の比喩に用いられることが多い。○たちかへて 裁ち替へて。仕立て直して。○ころもでの森 衣手の森。山城の国の歌枕。今の京都市西京区の松尾大社付近にあった森かと言われる。

【考察】五番も左右で題が異なる。

左の歌は、「鞆中見花」の題で、「春の山風」を擬人化し、山風が桜に宿を借り、花の衣を着て、親しげに通つてゆくと詠む。「かり衣きつつなれゆく」は、次の一首を思わせる。

〔古今集〕四一〇、在原業平

旅の歌で、左歌の背景として生かされていると思う。

右の歌は、「霞隔遠樹」の題で、これは「衣手の森」を擬人化し、唐錦と見えた秋の紅葉の衣を替えて、春は霞の衣の姿になったと詠む。森の姿を衣服に見立て、秋から春に衣替えをしたと趣向した作である。ただ、「唐錦」の衣とか「霞の衣」とかに見立てることは、古くから前例が多い。また、「から錦秋のかたみ」で始まる点で共通する次のような歌が、建仁元年二月の『老若五十首歌合』に詠まれている。

から錦秋のかたみや竜田山ちりあへぬ枝に風吹くなり（『老若五十首歌合』百五十三番右、宮内卿）

これは『新宮撰歌合』の前の月に行なわれた歌合の歌で、この歌合には右歌の作者雅経も歌人として参加しているから、その影響を受ける可能性は十分考えられる。

方人たちの批判は、左歌に対しては別になく、右歌に対しては、春の霞の歌に「から錦秋のかたみ」をもち出すのは「よしなくや」という指摘がされている。

俊成は、それを受ける形で左の勝とする。

六番 鞆中見花

左持

散位有家

11 都より吹きこむ風のおとづれも花にはつらき山路なりけり

右

宮内卿

12 古郷のたよりおもはぬながめかな花ちる比のうつつやまこえ

左歌、右申云、吹きこんといへる風のおとづれ、耳にたちてきこゆるにや。右歌、左申曰、ながめかなといへる、ながむればなどこそふるくもよみならはして侍れ、ながめといふ物のあるやうにやきこゆらん。判者申云、うつつやまこえ、伊勢物語にも、つたかへでしげりてなどこそ申したれ、花にはよみならはさずやべらん。右方人、当時桜おほくさきたるよし陳じ申せども、ながめことに心ゆかずとて、持とす。

【通釈】

六番 鞆中見花

左持

散位有家

11 都から吹いてくる風の訪れも、花には恨めしいことだ、——山路の旅で、そう思う。

右

宮内卿

12 ふるさとへの便りも、忘れるほどの眺めよ、——花の散るころの、宇津の山越えは。

左の歌について、右方が言うのには、「吹きこん」と詠んだ風の訪れの表現は、耳障りに感じられるかと思えます。右の歌について、左方が言うのには、「ながめかな」と詠んでいるのは、「ながむれば」などと古くも詠みならわしていますが、これは「ながめ」という物があるように思われるでしょうか、と指摘した。判者が言うのには、——（右歌の）宇津の山越えは、『伊勢物語』で

も、「蕪かへで茂りて」などと云ってはいるけれど、花については歌に詠みならわしていないかと思えます、とのことであつた。（これに対して）右方の人は、現在は桜が沢山咲いている由を説明したが、なお「ながめ」という言葉は特に満足できないという見方によって、判者は持とした。

【注】○吹きこむ風 吹き来む風。○うつつやま 宇津の山 駿河の国の歌枕。今の静岡市宇津ノ谷と岡部町との境にある山。○伊勢物語にも、つたかへでしげりてなど『伊勢物語』の東下りの段に、「宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蕪かへでは茂り、もの心細く、すずるなるめを見ることと思ふに……」（九段）などである。

【考察】左右とも「鞆中見花」の題の歌で、左の歌は、山路の旅をする都人の身には、都の方から吹く風は懐しく思われても、花にとつては「つらき」風だと、対照的に挙げた作である。

右の歌は、宇津の山越えに見た花の散るころの様子をとり上げて、「古郷のたより思はぬながめかな」と詠んでいる。このように詠んだのは、『伊勢物語』の東下りの段の、宇津の山で都の人を恋しく思う歌を詠むくだりを念頭に置いて、その懐しい都への便りも当面忘れるほど、花の散る眺めに心を奪われたというのであろう。

方人たちの批判は、左歌に対して右方が、「吹きこん」と詠んだのは「耳にたちて聞こゆる」と指摘する。これは音調上の批判であろう。右歌に対しては左方が、「ながめかな」と詠んだ「ながめ」の用語を不適当と指摘する。

俊成の批評は、右歌で花を「宇津の山」に結びつけて詠んだ点を問題視して、「宇津の山」は『伊勢物語』にも「蕪かへでは茂り」とは記すが、花については歌にも詠まれていないと指摘する。また右歌への左方の指摘を認めたようで、「ながめ」の用語を「ことに心ゆかず」とする。左歌への批評は記されていないが、判定は持である。

七番 雨後子規 左

左近衛権中将通具

13 むらさめのはるる雲間に時鳥月影ちぎるさよの一声

右勝 羈中見花

雅 經

14 岩ねふみかさなるやまを分捨てて花もいくへの跡のしら雲

左歌、右方申云、月影ちぎるとは、いかにちぎれるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申す。判者右もて勝とす。

【通釈】

七番 雨後子規 左

左近衛権中将通具

13 村雨の晴れた雲間に、時鳥が、澄んだ月の光を約束するように、夜の一声を響かせた。

右勝 羈中見花

雅 經

14 岩を踏み、重なる山を越えて来ると、花が幾重もの白雲になって、後ろに眺められた。

左の歌に対して、右方は、「月影ちぎる」とは一体どのように契つたのだろうかと批判した。右の歌に対して、左方は、問題点を挙げないばかりでなく、佳作であると言った。

判者も、右の歌を勝とした。

【注】○むらさめ 急に激しく降ってはやむ雨。にわか雨。季節を問わないが、用例は秋と夏が多い。○岩ね 岩根。「岩」と意味の上で大差はないが、元は岩が地に食いこんだ状態を意識した語であろう。○分捨てて 分け捨てて。踏み分けて行き、そこを通り過ぎて。○跡 通り過ぎたあと。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は「雨後子規」の題で、夜、村雨の晴れ間に、時鳥が「月影ちぎる」一声を響かせたと詠む。題意に沿った情景を平明に詠んだ一首のように見えるが、「月影ちぎる」という言い様を、右方は問題にしている。

右の歌は「羈中見花」の題で、重なる険しい山々を踏み分けて来て顧みると、花が幾重もの白雲として眺められたと詠む。歌の初めの一、二句の表現には次のような先例がある。

岩根踏む重なる山はあらねどもあはぬ日まねみ恋ひわたるかも (『万葉集』二四三六)

岩根ふみ重なる山にあらねどもあはぬ日おほく恋ひわたるかな (『伊勢物語』七十四段)

岩根ふみ重なる山はなけれどもあはぬ日かずを恋ひやわたらん (『拾遺集』九六九、坂上郎女)

この三首は同じ源の異伝歌と見られるが、その初めの語句を、右歌は重なる山々を踏み分ける旅の様子表現に用い、その山越えの後に振り返った眺めを、「花も幾重の跡の白雲」と、山々の花が重なる白雲と見える大景としてとらえている。

方人の批評は、左歌に対しては右方が、「月影ちぎるとは、いかにちぎれるにか」と問題視している。言い様として不精確と見たのであるうか。右歌に対しては左方は問題視するところがなく、「よろしき」作としたという。

俊成も右の勝とする。

【備考】七番右歌は『新古今集』(九三)に収められている。

八番 雨後郭公 左持

内大臣

15 子規こゑははれまにおとづれて雫を残す軒のたちばな

右 羈中見花

前大僧正慈円

16 よもぬれじかたのみののかり衣花の雪には宿からずとも

左歌、右申云、五月雨のはれ間といへる事、又もふりぬべきにや。雨の後の心にはいかが。左申云、晴間などいふ事は雨後のころつねの事なり。右歌、左申云、旅の心少きにや。又交野にさくらなどことにきこえずやはべらん。判者云、左歌、はれま雫など侍れど、雨としもきこえぬにや。右歌、たえて桜のなどよめるも、かた野のかたにかりせし時の歌なり。歌のさまもいうに聞ゆれば、かちとさだめらるるを、左なほ、かた野のかり日数もつもらず、ただひとへに遊獵の遊戯なれば、羈中の題には不叶やと申

すを、右方又申云、晴間といへるばかりにて、雨の後にもちひん事、いかが侍るべき。すべてまの字はよろづの事のみだにいひならはしたれば、雨やみぬるころはなしと申すによりて、又持とす。

【通釈】

八番 雨後郭公 左持

内大臣

15 時鳥の、声は晴れ間に聞こえてきて、軒端のたちはなは、しずくを
残していた。

右 羈中見花

前大僧正慈円

16 よもや濡れはすまい、交野の御野での狩衣は。——花の雪には、宿
を借りなくても。

左の歌について、右方は、「五月雨の晴れ間にと詠んだのは、さらに雨が降りそうなのだろうか。それなら雨の後という題の心から見てどうだろうか」と批判した。これに対して左方は、「晴れ間などというのは、雨後の心で言うことは通常のことである」と弁明した。一方、右の歌について、左方は、「(題の)旅の心があまり見られぬように思う。それに交野で桜の花など、特に知られていないことかと思ひます」と批判した。

判者が言うのに、「左歌は、晴れ間とか、しずくとか詠んでいます
が、雨を指すとは決められないかと思う。右の歌は、世の中にた
えて桜のなかりせば、などと詠んだのも、交野の方に狩りに行っ
た時の歌である。それに(右の歌は)その姿も優美に思われるの
で勝ち」と決められた。けれども左方はなお、「交野の狩りは、日
数も多く重なるわけではなく、ただ単に猟をして楽しむ遊びだか
ら、羈中(旅行中)という題の言葉には合わないかと思う」と言
う。一方で右方はまた、「晴れ間と言っただけで、雨の後の意味に
用いるようなことは、どういふものでしょうか。一般に間という
語は、あらゆる事のあいだに言いならわしているので、雨がやん
だことを意味しない」と言う。そのため、この勝負も持となった。

【注】○たちはな 橘。ミカン科の常緑の小高木。陰暦五月ごろ、香りの高い白い五弁の花が咲く。歌ではホトトギスと取り合わせて詠まれるのも目立つ。○かたののみの「交野」は、河内の国の歌枕。今の大阪府交野市から枚方市にかけての地。遊猟を好んだ桓武天皇の交野離宮以来、禁裏御料の野とされたので「交野の御野」と言う。ここでは「御野」に「蓑」をひびかせて「濡れ」「雪」などと縁語にした。○かり衣 狩衣。散文では「かりぎぬ」、和歌などでは「かりごろも」と言うことが多い。本来は文字どおり狩りに着た衣服で、それが公家の常用する略服になった。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は「雨後郭公」の題で、時鳥の声が雨の晴れ間に響き、軒のたちはなは雨のしずくを残していたと、景物として橘を加えて、初夏の季節感の濃い一首に仕立てている。

右の歌は「羈中見花」の題で、交野のみ野での狩衣は、花の雪ではよもや濡れることはあるまいと詠む。一首は用語から見て、次のような「交野のみ野の狩衣」の歌によったと思われる。

あられ降る交野のみ野の狩衣ぬれぬ宿かす人しなれば(『詞花集』一五二、藤原長能)

この冬の「かた野のみ野」の歌の「あられ」を、右歌では「花の雪」に替え、「花の雪」だから宿を借りなくても狩衣が濡れることはないと言んだのである。

方人たちの意見は、題の生かし様に関して、きびしい指摘が行なわれている。左歌については、「雨後」の心が薄い点が問題視される。右歌については、題の旅の心が少なく、また交野は「花」の名所なのか疑問視される。

これを受けた判者俊成の見解は、左歌は雨の心が十分に出ていないのに対して、右歌は「たえて桜の」などという歌も交野の狩の時の歌であるし、「歌のさまも優」なので勝とするというのである。「たえて桜の」の歌は、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(『伊勢物語』)

語』八十二段。『古今集』五三、在原業平)

を指し、この歌の詠まれた交野が花の名所であることを示したものである。

しかし方人たちは、この判者の見解に納得せず、なお論難を続けている。すなわち右歌については、交野の狩りは「遊獵の遊び」で旅というほどのものではない、と批判を加えている。左歌については、「晴間」という語で「雨後」を示すのは無理だ、と批判を重ねている。これらの左右の方人たちの主張に、判者俊成も配慮せざるを得ず、先の判定を変更して持とすることになったらしい。

九番 雨後郭公 左持

左大臣

17 さみだれをいとふとなしに子規人にまたれて月を待つらん

右 羈中見花

女房

18 風ふけば花は浪とぞこえまがふわけこし旅のすゑの松山

左右ともに申す旨なし。判者、ともにおもしろくこえ侍り。左の月を待つところ、右の花のなみ、ともにすてがたく侍るとて、持とす。

【通釈】

九番 雨後郭公 左持

左大臣

17 五月雨を嫌うでもなく、時鳥は、人に待たれて、自身は月を待つてゐるのだろうか。

右 羈中見花

女房

18 風が吹くと、花は白波が越えて行くかに見える、——踏み分けてきた旅の末に着いた末の松山よ。

左右ともに、方人たちの意見はなかった。判者の意見は、「二首とも面白く思われます。左の歌の(時鳥の)月を待つ心、右の歌の花の波は、双方とも捨て難いものです」とのことで、持と判定した。

【注】○旅のすゑの松山「旅の末」に「末の松山」を掛ける。「末の松

山」は陸奥の国の歌枕。今の宮城県多賀城市八幡の、末松山宝国寺の裏山辺りと伝えられるが、定かでない。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は「雨後郭公」の題で、五月雨をいとうとも見えず鳴く時鳥は、「人に待たれ」る存在だが、時鳥自身は「月を待つ」のだろうか、と詠む。時鳥も人と同様の心をもつかと、自由な想像を楽しんだところに特色のある作であろう。

右の歌は「羈中見花」の題で、旅の末に目にする末の松山は、風が吹くと一面に花が散り、白波が山を越えて行くように見える、と詠む。末の松山を詠んだ古歌に、

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ(『古今集』一〇九三、東歌)

浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る(『寛平御時后宮歌合』一四〇、『古今集』三三二六、藤原興風)

のような、波が山を越えることに触れたものがある。その着想を右歌は新しく生かして、末の松山に散る花を遠望した時の印象を、さながら白波が山を越えると見えた、山一帯の花の動きをとらえた大景にまとめている。

この左右の歌に対して、人々から批判する意見はなかったという。前の八番の場合のように批判するとすれば、題の「雨後」の心が乏しいとか、「末の松山」は花の名所なのかとかの意見が出て、当然であるようにも思われる。しかし、そういう意見が出なかったのは、作者の自由な心の表現が、まず人を引きつけ、細部にこだわる気を起こさせなかったためでもあろうか。

判者俊成も、左右ともに「おもしろく」と評し、特に左歌の時鳥の「月を待つ心」、右歌の「花のなみ」のとらえ方を、「ともに捨てがたく」思われると言ひ、持としている。

十番 雨後時鳥 左

有家朝臣

19 ほととぎす待つよひながら村雨のはるればあくる雲になくなり

右勝

讚岐

右

大宰大式範光

20 さみだれの雲間の月のはれゆくをしばし待ちける子規かな

右歌、殊よろしきなり、不_レ及_二沙汰_一可_レ勝之由、左方申。判者、同じく以_レ右為_レ勝。

【通釈】

十番 雨後時鳥 左

有家朝臣

十一番 松下晩涼 左持

散位隆信

19 時鳥は、待つ宵のまま時がたち、村雨が晴れると、夜明けの雲の中
で鳴くようだ。

右勝

讚岐

右

大宰大式範光

20 五月雨の雲の間の月が、晴れてゆくのを、しばらく待っていて、鳴く時鳥よ。

右の歌は、特に結構な作である、論じるまでもなく勝とすべきだとの旨を、左方が言った。

判者も、同様の見方で、右歌を勝とした。

【注】

○村雨 七番の「注」参照。

【注】

○すみよし 住吉。摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区のあたり。

【考察】左右とも「雨後時鳥」の題の歌で、左の歌は、時鳥は宵から待つまま時が移り、村雨の晴れた夜明けに声を聞き得たと、一夜の時の経過をとり入れて詠んでいる。

【考察】左右とも「松下晩涼」の題による歌。左の歌は、住吉の浜の松をとり入れて詠んでいる。その松の下に立ち寄ると、夕波が涼しく感じられる、松自体は常緑の色を保ち秋風の吹くのを感ぜさせないので、といった心の作であろう。その後半の心に作者の工夫があるかと思うが、やや理に落ちた趣向と言えるかもしれない。

右の歌は、五月雨の雲間の月が晴れてゆくのを、しばらく待っていて時鳥が鳴くと詠む。雨後の月光と時鳥の声との配合を喜ぶ人間の心を、時鳥ももっているように想像して詠んでいて、そこに一首の特色もあるであろう。こういう自由な想像を楽しむ詠み様は、前の九番の歌の場合と共通しているようである。

この右歌を、「殊によろしき」作で勝つべきものと左方も評価し、判者も勝としている。

【備考】十番右歌は、『新古今集』（二三七）に収められている。

十一番 松下晩涼 左持

散位隆信

21 たちよれば夕浪涼しすみよしの松をあきかぜふかぬものゆゑ

22 秋やとき風やすずしき松陰のおもひもわかぬ夕まぐれかな
左方申状又如_レ先。判者、左の夕浪すずしなど、よろしくきこゆるにや。仍持とす。

【新宮撰歌合】注釈

涼し」などの詠み様を「よろしく」思われると評価し、持と判定している。

十二番 山家秋月 左勝

通具朝臣

23 ささの庵露おく床の苔むしろしく物もなき秋の夜の月

右 松下晩涼

参議公経

24 友さそふ片山陰の夕すずみ松ふく風にひぐらしのこゑ

判者申云、友さそふといへる、すゑにもさせる故なきにや。左歌
いうにきこゆ。可_レ為_レ勝。

【通釈】

十二番 山家秋月 左勝

通具朝臣

23 笹ぶきの小屋の、露のおく床は、苔のほかに敷物もないが、秋の夜

右 松下晩涼

参議公経

24 友を誘い、片山の陰で夕涼みをすると、松風の音に合わせて、ひぐらしの音が響く。

判者が言うのに、——右の歌で「友さそふ」と詠んでいるが、下の句でもさほど適切な存在理由をもたぬ言葉であろうか。対する左の歌は優美に思われる。左を勝とすべきである。

【注】○ささの庵 笹でふいた粗末な小屋。○苔むしろ 苔の敷物。苔を敷物に見立てて言う。○しく物もなき 敷物もないことに、及ぶものもないことを掛けた表現。○片山陰 片側が山になっている地形で、その山陰。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「山家秋月」の題で、笹ぶきの粗末な山家で見ると秋の夜の月の美しさを詠む。第四句「しく物もなき」は、山家で敷物もない意と、月の美しさが及ぶものもない意とを掛けている。

右の歌は、「松下晩涼」の題で、片山陰で夕涼みをすると、松風の音に合わせて、ひぐらしの音が響く由を詠む。松風の音を詠んで名高い

歌に、

琴の音に峰の松風かよふらしいずれのをよりしらべそめけん（拾遺集）四五一、斎宮女御

の一首があり、峰の松風の音が琴の音に通うものとして歌われているのを、この右歌の場合も念頭に置いて見てよいかと思う。その音に合わせて、ひぐらしも声を響かせるのであろう。

しかし判者俊成は、右歌の初めの「友さそふ」は下句にもあまり結びつかないと指摘し、左歌を「優にきこゆ」と評価して勝とする。

十三番 山家秋月 左勝

左大臣

25 時しもあれ古郷人は音もせで深山の月にあきかぜぞふく

右 松下晩涼

前権僧正慈円

26 こずゑより夕風おつる松がねは秋まつ夏のなごりなりけり

判者申云、右歌雖_レ無_二指難_一、左猶よろしきによりて為_レ勝。

【通釈】

十三番 山家秋月 左勝

左大臣

25 こんなに寂しい時なのに、故郷の（昔なじみの）人の訪れもなく、深い山は月がさえ、秋風が吹く。

右 松下晩涼

前権僧正慈円

26 こずゑから、夕風の吹きおろす松の根方は、秋を待つ夏の名残を残す所であったのだ。

判者が言うのに、——右の歌は、これという欠点はないけれど、左の歌は、一層結構な作であるところから、勝とする。

【注】○時しもあれ 外に時もあろうに、時も時。ここでは、こんなに寂しい時というのに、の意。○音もせで ここでは、訪れもせず、の意。○指難 させる難。これといった欠点。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「山家秋月」の題で、心寂しい時も時、故郷の人の訪れもなく、この深い山では月がさえ、秋風が吹くと、寂しい情景としてまとめられている。

右の歌は、「松下晩涼」の題で、こずえから夕風の届く松の根方は、「秋まつ夏のなごり」の所だったと詠む。

判者の意見としては、右歌も別に欠点は見られないが、左歌が一層「よろしき」作であると評価し、左の勝とする。

【備考】十三番左歌は、『新古今集』（三九四）に収められている。

十四番 湖上暁霧 左

権中納言公継

27にほてるや浪路はるかに霧こめてやどりかねたる有明の月

右勝 松下晩涼

丹後

28すずしさを松の木陰にさきだててまだこぬ秋の夕ぐれの空

左申云、右歌尤宜、況以承伏。判者申曰、左歌雖無指難、右歌宜。仍為勝。

【通釈】

十四番 湖上暁霧 左

権中納言公継

27湖の、波路ははるかに霧が立ちこめて、有明の月が、宿りかねていと見えた。

右勝 松下晩涼

丹後

28涼しさを、松の木陰に先にもたらして、夕暮れの空に、秋はまだ来ていないようだ。

左方が言うのに、右歌は大層結構な作で、無論勝るとするのに異存はない、とのことであった。

判者の意見は、左の歌にこれといった欠点はないけれども、右の歌は結構に思う。それで右を勝とする、ということである。

【注】○にほてるや 湖の異名として歌学書に挙げる語。『喜撰式』に

「若詠湖時 にほてるやと云、『能因歌枕』に「にほてるやとは、水うみを云、『俊頼髓脳』に「水海、にほてるやといふ」など見える。

歌の用例には、琵琶湖周辺の地名に関して枕詞風に用いたものが多い。

○浪路 波の上の船の通う路。○有明の月 夜明けの空に残ると見える月。陰暦十六夜以後の月がこれに相当する。○承服 納得して従う

意。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「湖上暁霧」の題で、湖の波路に霧が立ちこめて、「有明の月」が宿りかねていと詠む。月を擬人的に詠み入れた辺りに工夫の見られる作である。

右の歌は、「松下晩涼」の題で、松の木陰に涼しさを先に送っておいで、夕暮れの空に「秋」はまだ来ていないと詠む。これは秋を擬人的に詠み入れているが、擬人に伴う不自然さはあまり感じさせないようだ。

この右歌を、左方も「尤宜」と評価し、判者俊成も、左歌に目立つた欠点はないが右歌を「宜」と見て勝としている。

十五番 湖上暁霧 左持

内大臣

29明けぬるか霧の絶まにみほがさきこぎはなれゆく遠の浮ふね

右 松下晩涼

権中納言兼宗

30夕まぐれ秋のけしきをさきだててたもにかよふ松の下かせ

判者云、をちのうきふね、いかにぞきこゆれども、右もことなる事なければ、持とす。

【通釈】

十五番 湖上暁霧 左持

内大臣

29夜は明けたか、——霧の切れ目に、みおが崎を離れてこいで行く、遠い浮き舟が見える。

右 松下晩涼

権中納言兼宗

30夕暮れ、秋の様子を先にもたらして、たもとに吹いてくる松の下風よ。

判者が言うのに、——左の歌の「をちの浮き舟」という言葉は、どうかと思われるけれども、右の歌も格別のことはないので、持とする。

【注】○みほがさき 一般に歌枕の「みほ」は、駿河の国または紀伊の国の海辺なので、左歌の題の「湖上」にふさわしくない。それで「八

雲御抄』名所に近江の国の歌枕として挙げる「みをが崎」のことと考へたい。『万葉集』(七三三)に「水尾崎」とあり、琵琶湖岸で、今の滋賀県高島郡高島町南部の明神崎かという。○遠をち。遠方。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「湖上暁霧」の題で、「みほが崎」を離れて行く舟を湖上の朝霧の間に見る情景として詠む。

右の歌は、「松下晚涼」の題で、松の下風が夕暮れ、「秋のけしき」を先にもたらし吹くと詠む。

判者俊成は、左右共にさしたる特長を見いださなかつたようで、持としてゐる。

十六番 湖上暁霧 左

通具朝臣

31 しがの沖やいづくを霧のへだつらん浪より出づる有明の月

右勝 山家秋月

前権僧正

32 影清き月よりおつる袖の雨の雲は秋の夜軒はやまのは

右申云、左歌は只望「秋月之出」心也。暁霧のへだてなし。題の心如何。左無「申旨」。判者云、右歌心詞尤よろし。興あり。仍為「勝」。

【通釈】

十六番 湖上暁霧 左

通具朝臣

31 志賀の沖は、どこに霧の隔てる所があるうか、——その波間から、

有明の月が出る。

右勝 山家秋月

前権僧正

32 光も清い月から落ちる雨が、袖をぬらす、——空は秋の夜で、軒は

山の端が見えて。

右方が言うのに、左の歌は、ただ秋の月の出るのを遠く眺めた心であり、(題の)暁の霧の隔てる心が見られない、題の心はどうか、と批判した。左方は、別に意見はなかつた。

判者の意見は、右の歌は心も言葉も大層結構だ、面白い、それで右の勝とする、ということであつた。

【注】○しが 志賀。近江の国の歌枕。琵琶湖の西南岸で、今の大津市

と滋賀郡にわたる地。○袖の雨 袖をぬらす雨。涙を言ったのである。○雲 空を言うか。雨の縁語。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「湖上暁霧」の題で、湖上に霧の隔てる所もなく、波間から有明の月が出る景を詠む。これは題の心を十分に生かして詠むことが求められた当時の題詠の常識によれば、題の霧の存在を否定して詠んだ点で、落題のそしりを受けることにな

る。

右の歌は、「山家秋月」の題で、空の秋月と下の山家との様子を詠む

が、伝統的な詠み様にとられず、かなり自由な形をとっている。思

いのままに印象的なイメージを並べたようなところがあつて、作意の

とらえにくさにもつながると思う。しかし上の句「影清き月よりおつ

る袖の雨」は、清い月の光を眺めているとつい涙が袖をぬらすのを言

たかと思われる。そして「雨」の縁で、下の句の初めに空を「雲」と

言い、空は「秋の夜」で、「軒は山の端」と、秋の夜空と山家の様子を

伝えていると見たい。そういう見方による私解を「通釈」に記してみ

たが、いかがであろうか。

方人の意見は、左歌に対しては、前記のような落題の批判が加えら

れている。判者俊成は、右歌に対して「心詞尤よろし。興あり。」と評

十七番 嵐吹寒草 左

内大臣

33 秋はててあはれは猶ぞ残りける花もあらしの野への夕暮

右勝 山家秋月

定家朝臣

34 宮古人さらでも松の木の間より心づくしの月ぞもりくる

判者云、右為「勝」。

【通釈】

十七番 嵐吹寒草 左

内大臣

33 秋が終わっても、あわれさはなお残っていた、——散り残る花もあ

るまいと思う、嵐の吹く野辺の夕暮に。

右勝 山家秋月

定家朝臣

34 都の人を、たださえ恋しく待つ身なのに、松の木の間から、もの思いの限りをさせる月の光がもれてくる。

判者の意見は、右の歌を勝とする。

【注】○残りける 「あはれは猶ぞ残りける」に「残りける花」を掛けた表現。○あらし 強い風だが、前の言葉に続けて読むと、「残りける花もあらし」を重ねた表現。○宮古人 都人。○松 都人を「待つ」を掛けた表現。○心づくし もの思いの限りを尽くすこと。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「風吹寒草」の題で、秋が過ぎても「あはれ」はなお残るとして、嵐の吹く野辺の夕暮の景を、掛詞などを用いて詠んでいる。

右の歌は、「山家秋月」の題で、山家に暮らして都を恋しく思う身の「心づくしの月」の光を見る思いを詠む。これは、次の古歌を本歌として詠まれた作と思われる。

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり（『古今集』一八四）

今集』一八四）
この詠み人しらずの歌と比べると、定家作の右歌は、共通する語句が幾つかあるが、その位置を変えたり、都人の訪れを待つ心を加えたりして、一応再生に成功していると言えるであろう。
歌の評価については、判者俊成が右歌を勝としたことのみが記録されている。

十八番 風吹寒草 左

積阿

35 をざさ原夜半の嵐ははらへども葉分の霜は猶むすびけり

右勝 山家秋月

女房

36 柴のとやさしきみやまべの月ふく風にさをしかの声

右申云、左のをざさはらは、色かはらぬ物なれば、かれたる草にあらずや。左申云、さは草なり、冬は寒ければ、寒草になどかよまざらむと申す。判者云、右歌、あなおもしろ、無「左右」勝と

定め申す。

【通釈】

十八番 風吹寒草 左

積阿

35 笹原を、夜ふけ、強い風が吹き払ったが、葉ごとの霜は、なお消えずに残っていた。

右勝 山家秋月

女房

36 柴の戸の、かように寂しい山深い住まいで、山辺の月を吹く風に乗って、雄鹿の鳴く声がする。

右方の意見として、左の歌で「をざさはら」を詠んでいるが、笹は季節によって色の変わらないものだから、(題の) 枯れた草に合わないものだ、と言う。(これに対して) 左方の意見として、笹は草だ、冬は寒いから、これを(題の) 寒草として詠むのは当然のことだ、と言う。

判者が言うのには、右の歌は実に面白い、問題なく右の勝である、と判定した。

【注】○をざさ原 笹原。「を」は接頭語。○葉分の霜 「葉分」は、葉ごとに分ける意。葉ごとに置く霜。○柴の戸 雑木で造った粗末な戸。○さをしか 雄鹿。「さ」は接頭語。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「風吹寒草」の題で、笹原を夜半に嵐が吹き払ったが、「葉分の霜」は消えずに残ったと、細かいところまで目を向けて詠んでいる。

右の歌は、「山家秋月」の題で、「柴の戸」の「さびしき山辺」の住まいでは、山辺の「月吹く風」が「さを鹿の声」を運んでくると、鹿の声も加え、風物のイメージを重ねて気分を伝えようとしている。声調も、サ音の反復などが目立ち、流麗と言えるであろう。

歌の評価については、左歌で詠んだ「笹」が題の「寒草」にふさわしくないとする右方の批判があり、これに対する左方の反論があったことが記録されている。左歌の作者で判者であった俊成は、その問題にはそれ以上触れず、後鳥羽院作の右歌を「あなおもしろ」と評し、

勝と判定する。

【備考】十八番右歌は、『玉葉集』（六九八）に収められている。

十九番 風吹寒草 左持

保季

37 山嵐にかれ野のまくずうちなびき霜に恨みや結びはつらん

右 山家秋月

雅經

38 よそにみし雲より奥に宿しめて梢にいつる山のはの月

右申云、葛の葉のうらみなどは、枯れはてぬ折にや読むべからん。

判者云、いづれも無殊事、為持。

【通釈】

十九番 風吹寒草 左持

保季

37 山風を受け、枯野の葛が葉裏を見せてなびいているが、霜に恨みをもち通したということだろうか。

右 山家秋月

雅經

38 よそ事と思つた雲の奥、山深くに住んで、山の端の月が、梢に出るのを見ることだ。

右方の意見として、葛の葉が裏を見せるなどということは、枯れてしまわない時に詠むべきであろう、と言う。

判者が言うのに、二首とも格別の作ではないとのこと、持とした。

【注】○山嵐 山おろし。山から吹きおろす風。○まくず 真葛。【ま

は接頭語。「葛」は、マメ科、つる性の多年草。平安時代以降は、風に翻つて白い葉裏を見せる姿が注目され、「裏見」に「恨み」を掛けて歌に詠まれることが多い。○よそにみし 自分とは無縁のものと思つたことを言う。よそ事と見た。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「風吹寒草」の題で、山嵐に枯野の葛が葉裏を見せてなびくのは、霜に恨みをもつてのことかと、葛の葉の「裏見」に「恨み」を掛ける伝統的な技法を用いて詠んでいる。右の歌は、「山家秋月」の題で、思いがけず山深くに住む身となって、

「山の端の月」が「梢に出づる」のを見ることになったと詠む。「山の端の月」は、貫之の歌に、

都にて山の端に見し月なれど波よりいでて波にこそ入れ（『土佐日記』二六）

とあるように、平安京では月は山の端から出て山の端に入るのが普通であったので、それが山奥では「梢に出づる」のを見たと思んだのであろう。

歌の評価については、左歌で葛の葉が裏を見せることを詠んでいるが、これは枯れ葉になる前のことで、「寒草」の題に合わない点が右方から指摘されている。判者は、左右ともに「殊ナル事無し」と見て、持としている。

二十番 風吹寒草

越前

39 さらに又秋にもかへすあらしかな霜がれはつる萩のした葉を

右勝 湖上暁霧

前権僧正

40 うす霧の汀をこむる有明の月にうらあるしがのからさき

右申云、萩の下葉を秋にもかへすとは、いかによめるにか。左申

云、あはれを又かへすなり。判者云、うす霧すこし耳にたてども、歌のさま宜し。仍為勝。

【通釈】

二十番 風吹寒草

越前

39 もう一度、秋に立ち返らせるような、強い風よ、——霜枯れはてた萩の下葉を吹いて。

右勝 湖上暁霧

前権僧正

40 薄霧が汀を包んで、夜明け、消え残る月の下に浦を見る、志賀の唐崎の眺めよ。

右方が、左の歌に「萩の下葉を秋にもかへす」とあるのは、どういう意図で詠んだのか、と疑問視した。左方は、それは秋の「あはれ」を再び取りもどすことだと答えた。

判者が言うのに、右の歌は「薄霧」の語がいささか耳障りだけれども、歌の姿が結構だと思ふと、右を勝とした。

【注】○萩のした葉 「萩」は新編国歌大観に見える形で、新校群書類従は「萩」とする。「萩」も「萩」も秋風とともに歌に詠まれる景物だが、前者が「萩の上葉」「萩の上風」などと一般に詠まれるのに対して、後者も初めは「萩の上の露」などが取り上げられたが、平安時代後期以降は「萩の下葉」「萩の下露」などと詠まれるようになる。そして「萩はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露」(『義孝集』四)の一首が『和漢朗詠集』(二二九)に収められて知られていたことも考慮すると、当面の左歌の場合、「萩の下葉」と見る方が、より妥当であろうか。○しがのからさき 志賀の唐崎。近江の国の歌枕。今の滋賀県大津市、琵琶湖西岸の岬。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「嵐吹寒草」の題のもの。「注」で触れたように「萩」か「萩」か本文に問題があるが、「萩」として見たい。霜枯れた萩の下葉に、過ぎた秋を思わせて風が吹くという情景であろう。

右の歌は、「湖上暁霧」の題で、場所を湖畔の志賀の唐崎にとり、薄霧がみぎわを包み、有明の月の下に浦を見る景を、イメージを連ねるような形で詠んでいる。

方人の批判は、右方から、左歌の「萩の下葉を」「秋にもかへす」とはどういう意味かと疑問が出されている。判者は右歌を挙げ、「うす霧」を少し耳障りな語としながらも、「歌のさままじし」と言い、勝とする。「うす霧」の語を問題視したのは、古い用例が乏しいためであろう。このころから後の用例は多いが。

二十一番 嵐吹寒草 左

41木の葉ちりて後はむなしきとやまよりかれ野の草に嵐おつなり

右勝 湖上暁霧

左大臣 女房

42しがの浦やにほてる沖に霧こめて秋もおぼろの有明の月

『新宮撰歌合』注釈

左右未^レ申先に、判者云、右歌殊以染^レ心肝。左又いなりといへども、尚以^レ右為^レ勝よし申^レ之。

【通釈】 二十一番 嵐吹寒草 左 左大臣

41木の葉が散つて、もう何もない外山から、枯野の草に、嵐の吹き下ろす音がする。

右勝 湖上暁霧

女房

42志賀の浦の、月影に映える沖に、霧が立ちこめて、秋もおぼろに見える有明の月よ。

左右の方人が発言するの先に先立つて、判者が意見を述べ、右の歌は特に深く心にしみ入るものがあり、左の歌も優美ではあるけれど、やはり右を勝とする由を告げた。

【注】○とやま 外山。人里に近い、端の方の山。○しがの浦 志賀の浦。近江の国の歌枕。十六番の「注」参照。○にほてる 琵琶湖に月の光が照り映える意か。このころ以後の中世の歌で、「鳩の海」と呼ばれた琵琶湖や周辺の風物に関して月光が美しい場合に用いられている。枕詞とも見られるが、「さざ波やしがの浦風海吹けばにほてりまさる月の影かな」(『宝治百首』一六〇〇)という用例もある。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「嵐吹寒草」の題で、木の葉が散り空虚な外山から、嵐が枯野の草に吹き下す様子を、簡潔に詠む。

右の歌は、「湖上暁霧」の題で、沖の湖上の輝きを包むように霧が立ちこめ、春ではないがおぼろな秋の有明の月が美しい由を詠む。表面に露出しない深い美に心を向ける、中世的な美意識のうかがわれる一首であろう。

左右の方人が発言する前に、判者俊成は、右歌が殊に「染^レ心肝」と感銘した旨を告げて、勝としたと記される。

【備考】二十一番右歌は『新統古今集』(五四九)に、第二句「にほてる沖は」の形で収められている。

二十二番 雪似白雲 左勝

内大臣

43 雪ならば月と友にやながめやらんいとひなはてそ峰の白雲

右 湖上眺望

右馬助家長

44 にほの海やうらつたひ行く霧のまにたえだえはるる有明の月

右歌、ひとへに先年の百首の御製に似たり。仍左を可^レ為^レ勝之由、判者申す。

【通釈】

二十二番 雪似白雲 左勝

内大臣

43 雪ならば、月とともに眺めようか、——峰の白雲として、見捨てて

はいけないのだ。

右 湖上眺望

右馬助家長

44 鳩の海の、浦伝いに動く霧の間に、とぎれながら、晴れて見える有

明の月よ。

右の歌は、全く先年の百首の御製に似ている。そのため左の歌を勝とする由を、判者が告げた。

【注】○にほの海 鳩の海。近江の国の歌枕で、今の琵琶湖。琵琶湖は古くは「淡海」「近江の海」と言われ、「鳩の海」の名は平安時代中期以後に広まったようである。(鳩はカイツブリで、潜水する水鳥として息が長いと見られたので「鳩鳥の」が「息長川」の枕詞に用いられ、その川が琵琶湖にそそぐところから、琵琶湖を「鳩の海」と呼んだかと言われる。)

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「雪似白雲」の題で、白く見えるのが雪なら、月とともに眺めよう、峰の白雲と見て初めから見捨ててはいけない、との心であろう。

右の歌は、「湖上眺望」の題で、琵琶湖の浦伝いに移動する霧の間に、有明の月が見える様子を、叙景的にとらえている。

判者俊成は、この右歌が「ひとへに先年の百首の御製に似たり」と評して、対する左歌を勝としたと記録される。(ただ、その「先年の百首の御製」で該当する歌は、目下未詳。)

二十三番 雪似白雲 左持

寂蓮

45 あらし吹くみねにつれなきしら雲のたつかと見れば松の雪折

右 嵐吹寒草

定家朝臣

46 あさぢふや残るは末の冬の霜おきどころなく吹くあらしかな

左右たがひによるしき由申^レ之。判者、共以優なり。可^レ為^レ持。

【通釈】

二十三番 雪似白雲 左持

寂蓮

45 嵐の吹く峰に、風に構わぬ白雲が出たかを見ると、それは松の雪折れの姿だった。

右 嵐吹寒草

定家朝臣

46 浅茅が原の、枯れ残る葉末に、冬の霜の置き所がないほど、激しく嵐が吹く。

左右とも互いに結構な作である由を言った。判者も、左右の歌はいずれも優美である、持とすべきだと判定した。

【注】つれなき 素知らぬ様子の。○雪折 降り積もった雪の重みで、木の幹や枝が折れること。○あさぢふ 浅茅生 丈の低いチガヤが生えている所。チガヤは、イネ科の多年草で、群生する。○は末 葉末。【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「雪似白雲」の題で、強い風にもかかわらず峰に白雲が出たかと思ったが、それは「松の雪折れ」だったと、雪を白雲に見立てて詠む。

右の歌は、「嵐吹寒草」の題で、浅茅が原の冬に残る葉末に、霜も置けないほど強く吹く嵐だと、題意に沿う情景を、イメージを重ねる形で詠んでいる。

判者は 左右ともに「優」であるとして、持と判定している。

二十四番 雪似白雲 左

釈阿

47 古郷はさゆる雲とやみよし野の吉野のおくの峰のしら雪

右勝 嵐吹寒草

範光

48 萩はらやいまはかれ葉に吹きかへて嵐になりぬ野べのあき風

左歌宜しきよし、人人これを申すといへども、判者、以_レ右為_レ勝。

【通釈】

二十四番 雪似白雲 左

積 阿

47 古里の人は、冷たく澄む雲と見るであろうか、——吉野の奥の峰の白雲を。

右勝 嵐吹寒草

範 光

48 萩原の、今は枯葉になったのに合わせて、野辺の秋風も、嵐が変わって吹くことだ。

左の歌が結構である由を、人々が言ったけれども、判者は、右の歌を勝とした。

【注】○古郷 古里。この左歌に用いられた場合、吉野は古く離宮のあった所なので、そのことを意識して言ったと思われる。○みよし野の

前の「雲とや」に続けて「見」を、「み吉野」（吉野の美称）に掛けて言う。そして「み吉野の」で後に続く「吉野」の語に枕詞風にかかる。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「雪似白雲」の題で、古里の人は、「吉野の奥の峰の白雪」を「さゆる雲」と見るだろうかと詠む。吉野山を雪深い所として歌に詠むのは、平安時代初期以来の伝統だが、ここでは古里の人が遠望した情景として、印象的に描いている。

右の歌は、「嵐吹寒草」の題で、萩原が冬を迎えて枯葉になったのに合わせて、秋風も嵐になって吹くと詠む。

この二首の評価については、左歌を「宜しき」ものとする人々の意見に反して、判者俊成は右歌を勝としたという。その理由は記されていないが、俊成が自作の左歌をあえて低く評価したことは考えられる。八十八歳になった俊成にとつて、それが自然なことだったのであろうか。

二十五番 雪似白雲 左

季 保

49 よそにては雪ともえこそ白雲のかはらぬ色をみよしのの山

右勝 嵐吹寒草

女 房

50 草の原露のやどりをふくからに嵐にこぼるみちしばの霜

不_レ及_二左右_一以_レ右為_レ勝之由、判者申_レ之。

【通釈】

二十五番 雪似白雲 左

季 保

49 遠くからは雪と知られない、白雲と変わらぬ（雪の）色を、吉野の山に見るのです。

右勝 嵐吹寒草

女 房

50 草の原の、露の宿りを嵐が吹くと共に、その風に（露が）凍って、道芝の霜となる。

論じるまでもなく右を勝とする由を、判者が述べた。

【注】○えこそ白雲の 「えこそ知らね」の心を「白雲」に掛けた。○かはらぬ色をみよしのの山 「変はらぬ色を見」る心を「み吉野」に掛けた。○露のやどり 露の宿る所。○ふくからに 吹くとともに。○みちしば 道芝。道端に生えている芝草。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「嵐吹寒草」の題で、遠くでは雪と知られず、白雲と変わらぬ雪の色を、吉野の山に見ると詠む。吉野山を雪深い所として詠むのは、前の二十四番左歌と同様だが、これは掛詞を二度用い、また詠み様に説明的な傾きがあるようだ。

右の歌は、「嵐吹寒草」の題で、「草の原」の「露の宿り」を嵐が吹くと、露が凍って「道芝の霜」となる、と詠む。一首はイメージを重ねて情景を表しているが、用いられた言葉から見て、次の『狭衣物語』の歌を念頭に置いて詠まれたと思われる。

たづぬべき草の原さへ霜枯れてたれに問はまし道芝の露（『狭衣物語』卷二）

これは狭衣が飛鳥井女君を思って詠んだ歌である。また、次の『源氏物語』の贈答歌も下敷きになっていると見てよいかと思う。

うき身世にやがて消えなばたづねても草の原をばとはじとや思ふ
いづれぞと露の宿りを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け（『源氏

物語「花宴」

これは朧月夜と源氏との歌である。こういう『狭衣物語』や『源氏物語』の歌を、物語の中の人物の心情も含めて感じさせる点で、右歌は、内容に奥行きが深いものがあると言えるであろう。右歌の作者、後鳥羽院による新しい中世的な和歌の典型を示す一首と思われる。

判者俊成は、この右歌を「不_レ及_二左右_一」勝としたと記録されている。

二十六番 寄神祇祝 左勝

51 君が代のちとせのかけやうつらん天照るひかりわくるかがみに

右 嵐吹寒草

権大納言忠良

内大臣

52 萩原や霜おく色はかはれども嵐をあきのなごりとぞ思ふ

判者、以_レ左_レ為_レ勝。

【通釈】

二十六番 寄神祇祝 左勝

内大臣

51 君のみ代の、千年も続く様子は、映っていることだろうと思う、

——天照大神のご威光を分けた鏡に。

右 嵐吹寒草

権大納言忠良

52 萩原の、霜の置いた色は、前とは変わっているが、嵐を秋（風）の名残なのだと思う。

判者は、左の歌を勝とした。

【注】○君が代 「君」は一般的に言えば尊敬すべき人だが、特に高貴な身分の人、さらに天皇を指して言う場合が多い。こゝも天皇の治世と見られる。○天照るひかり 天に輝く神（天照大神）のご威光。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「寄神祇祝」の題で、天皇の御治世の永続することは、天照大神のご威光を伝える神鏡に映されて明白であろうと詠む。

右の歌は、「嵐吹寒草」の題で、萩原は霜が置いて色が変わったが、吹く嵐に秋（風）の名残を感じると詠む。

判定は、判者が左を勝としたとのみ記される。神威に寄せた歌は負

としないのが通例とされたから、その点は当然の判定である。

二十七番 寄神祇祝 左勝

53 君が代のしるしとこれを宮川のみねの杉原いろもかはらず

右 雪似白雲

定家朝臣

54 冬のあしたよし野の山のしら雪も花にふりにし雲かとぞ見る

判者云、以_レ左_レ為_レ勝。

【通釈】

二十七番 寄神祇祝 左勝

左大臣

53 君のみ代を示すものと見る、宮川のほとりの峰の杉原は、その色が

変わることがない。

右 雪似白雲

定家朝臣

54 冬の朝、吉野の山の白雪は、雲が花として降りしいたものかと思っ

て見るのです。

判者は、左の歌を勝とすると言った。

【注】○君が代のしるし 君のみ代の象徴。○宮川 ここでは「見」る

心みやがはを「宮川」に掛ける。宮川は、伊勢の国の歌枕で、今の三重県中部を流れる川。源を大台ヶ原山に発し、杉林の茂る大杉谷を経て、伊勢神宮外宮の西方を流れ、伊勢湾に注ぐ。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「寄神祇祝」の題で、「君が代」を象徴すると見る「宮川のみねの杉原」は、不変の色を保つと詠む。

「宮川」が伊勢神宮の外宮の近くを流れるところから、「君が代」の長久は神が証明されていると祝う心と思われる。

右の歌は、「雪似白雲」の題で、冬の朝、吉野山に積もった白雪は、「花にふりにし雲か」と見ると詠む。吉野山は古くは雪深いところと見られたが、後には花の名所とされた。

春のあした、吉野の山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむおほえける。（『古今集』仮名序）の一節を思わせる表現でもある。

判定は、前の二十六番と同様、判者が左を勝としたのみ記される。左歌が神威に寄せた歌であること、二十六番と同様である。

【備考】二十七番左歌は『風雅集』(三二八)に収められている。

二十八番 遇不会恋 左 越前

55 くやしきにおつる涙をせきかねて空なる名をや袖にのこさん

右勝 雪似白雲 女房

56 雪やこれはらふたかまの山風につれなく雲の峰に残れる

左歌不及沙汰、右歌可為勝之由、判者申之。

【通釈】

二十八番 遇不会恋 左 越前

55 再び会えない悔しさに、落ちる涙を抑えかねて、むなしい浮名のしるしを、袖に残すことになろうか。

右勝 雪似白雲 女房

56 これは雪だったのか、——吹き払う高間の山の山風にも、素知らぬ様子で、雲が峰に残ると見えたが。

左の歌は問題にするまでもなく、右の歌を勝とすべき由を、判者が告げた。

【注】○遇不会恋 あひてあはざる恋。一度会ってのち会わなくなった恋の心を詠む歌題として、『堀河百首』のころから用いられた。○空なる名「空なる」は「あだなる」であろう。実のない浮名。○たかまの山 高間の山。大和の国の歌枕。今の奈良県と大阪府との境に位置する金剛山の古名と言われる。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「遇不会恋」の題で、恋人に再び会えぬ悔しさに、涙を抑えかね、浮名のしるしを袖に残すと詠む。題の心を素直に生かした作であろう。

右の歌は、「雪似白雲」の題で、吹き払う高間の山風にも、「つれなく」雲が峰に残ると見えたが、実は雪だったか、と詠む。こういう詠み様をしたのは、多分、高間の山の峰の白雲を詠んだ次の歌が、作者

『新宮撰歌合』注釈

の念頭にあったためであろう。

よそにのみ見てややみなむ葛城の高間の山の峰の白雲(和漢朗詠集)四〇九)

この詠み人しらずの一首は、近づき難い人を「高間の山の峰の白雲」になぞらえた恋歌として『新古今集』(九〇〇)に収められることになるが、当面の右歌はこの恋歌によつたために、「つれなく雲の峰に残れる」と詠んだのであろうと思われる。

この右歌の詠み様は、本歌取りと言ってよく、拠つた歌のイメージを加えて歌の内容に奥行をもたせるもので、中世の新しい歌風につながると言えそうである。

判者の俊成は、一議に及ばず右歌の勝と判定したと記録されている。

【備考】二十八番右歌は『風雅集』(八〇二)に、第四句「つれなき雲の」の形で収められている。(第四句を「つれなき雲の」とする点は、『後鳥羽院御集』も同様である。)

二十九番 遇不会恋 左勝 釈阿

57 泊瀬川又見むとこそたのめしか思ふもつらし二もとの杉

右 寄神祇祝 宮内卿

58 数しらぬ君がよはひか神風やみもすそ川のせぜのしき浪

判者、以右勝とすべきよし申すを、左右ともに左を可為勝之由申請也。

【通釈】二十九番 遇不会恋 左勝 釈阿

57 初瀬川が布留川と合うように、また会おうと(あの人は)頼りに思

わせたが、川辺の二本杉を思うのも、つらい身になった。

右 寄神祇祝 宮内卿

58 数えきれない、君の御寿命の年の数です、——御裳濯川の瀬々に、

絶えず寄せる波の数と同様に。

判者は、右の歌を勝とすべきだとの由を告げたけれども、左方右

方ともに、左の歌を勝とする判定を願った結果、それが承認されたのである。

【注】○泊瀬川 初瀬川。大和の国の歌枕。今の奈良県桜井市初瀬の辺りを流れる川で、布留川を併せ、佐保川に合流し、大和川になる。これを詠み入れた歌で特に有名なものが、旋頭歌「初瀬河ふる河の辺に二本ある杉 年をへてもあひ見む二本ある杉」〔古今集〕一〇〇九、よみ人しらずで、当面の左歌もこれによって詠まれていると思われる。○ふたもとの杉 前項に引いた旋頭歌の「二本ある杉」による語であろう。二本（で対になった）杉。相愛の男女を表わすものとして詠まれていると思われる。○神風や 枕詞として「伊勢」や伊勢の外宮関係の地名などにかけて用いられる。○みもすそ川 御裳濯川。伊勢の国の歌枕で、今の三重県伊勢市、伊勢神宮の内宮神域内を流れる五十鈴川の別名。○せぜのしき波 川の瀬々に繰り返し寄せる波。「しき波」は一本「しら波」。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「遇不会恋」の題で、この題は女の立場で詠むのが例である。ここでは「泊瀬川」や「二もとの杉」とり入れて詠んでいるが、これは次の旋頭歌によったと思われる。

初瀬河ふる河の辺に二本ある杉 年をへてもあひ見む二本ある杉〔古今集〕一〇〇九、よみ人しらず

この歌の中の「ふる河」は、古川と見る説もあるが、初瀬川に合流する布留川とすると、二つの川の合流する辺りの二本杉のように、年がたったら二人はまた会おうと約束した歌と見られる。当面の左歌は、この旋頭歌を背景にして、初瀬川が布留川と合流するように、二人がまた会うことを恋人は約束したけれど、会うことはかなわず、あの川辺の二本杉を思うのもつらいと嘆いたものと解される。旋頭歌を本歌とすることで、歌の内容を豊かにしていると思う。

右の歌は、「寄神祇祝」の題で、「君がよはひ」の「数しらぬ」多さを、内宮の神域を流れる「御裳濯川」の「瀬々のしき波」の数の多さになぞらえて祝っている。格調の整った歌と見えるが、着想は新しい

ものではなく、下旬の類似した次のような先行歌もある。

たちかへり又も見まくのほしきかな御裳濯川のせぜの白波〔新古今集〕一八八一、源雅定

判者俊成が、右歌を勝とすべきものとしたのは、右歌が神に関するものであり、対する左歌が自作であることから、当然とも見られる。しかし衆議は左歌を高く評価した結果、判定が左勝に変更されたようである。

【備考】二十九番左歌は、『新後撰集』（二二九四）に収められている。

三十番 遇不会恋 左 家隆

59 いまこんの契りは夢かききたへの枕の上にあり明の月 右勝 寄神祇祝 女房

60 神風や八重のさかき葉かさねてもみもすそ川の末ぞはるけき 右歌、祝によりて可勝之由、判者申之。

【通釈】三十番 遇不会恋 左 家隆

59 すぐ来ようという、約束は夢だったのか、——枕の上に、むなしく有明の月がさす。 右勝 寄神祇祝 女房

60 伊勢の大神のご威徳は、八重榊の葉のように世を重ねても、御裳濯川のように未長く続くのだ。 右の歌は、祝の心があるので勝とすべきである由を、判者が告げた。

【注】いまこんの契り すぐに会いに来ようという約束。○しきたへの「枕」にかかる枕詞。「敷栲」は敷物にする布で、寝具に用いられる縁であるが、ここでは天照大神の威徳を示す語として用いたのであろう。○八重のさかき葉 八重榊の葉。「八重」は、幾重にも重なる様子、「榊」は、神事に用いられる木だが、特に皇大神宮の中重鳥居の左右に

立てる多くの櫛を「八重櫛」と言う。○みもすそ川 御裳濯川。二十九番の「注」参照。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は、「遇不会恋」の題で、女の立場で詠まれている。「今こんの契りは」で始めて「有明の月」と結んでいるが、そのことから見て、次の歌によって詠んだものであろう。

今こむといひしばらくりに長月の有明の月を待ちいでつるかな（『古今集』六九一、素性）

左歌は、この「今こむ」という約束によって人を待ったが、訪れのないうまま「有明の月」を見る時刻になったとの本歌の心に沿って詠まれている。しかし「契りは夢か」と言い、「夢」との縁で「枕」を出し、「枕の上に有明の月」とむなしい床の様子を具体的に示したのは、新しい特長と言えるであろう。

右の歌は、「寄神祇祝」の題で、「神風」の語により神の威徳を示し、それが世を「重ねて」、「末ぞはるけき」ものに思われるとの心を詠んだのであろう。その場合、「重ねて」を修飾する「八重の櫛葉」や、「末ぞはるけき」を修飾する「御裳濯川」が、伊勢神宮の内宮に関係するところから、神は天照大神を指しており、その威徳により、皇室を中心とする世を重ね 末長く続くことを祝賀する心を示したと思われる。判者俊成は、この右歌が神に関する作である点を挙げて、勝と判定したと記される。

三十一番 遇不会恋 左

長明

61 ながれてとなにおもひけんかち人のわたれどぬれぬ逢せばかりに
右勝 寄神祇祝 慈円

62 君がよを万世とこそかぞふらめ七のやしろのみつのひかりは
以「右為」勝のよし、判者左右ともに申すなり。

【通釈】

三十一番 遇不会恋 左

長明

61 永らえてまた会おうと、なぜ思ったのだろう、——歩いて渡っても

裾の濡れない川の瀬のような、浅い会う瀬があっただけで。

右勝 寄神祇祝

慈円

62 君のみ代を、万世と数えておられるだろう、——山王七社の神のおほしめしでは。

右の歌を勝とすることについて、判者も左右の人たちも同じ意見であった。

【注】○ながれて「流れて」に、永らえての意を掛けて言ったものと見たい。こういう「流れて」の用例は、「水のあわの消えでうき身といひながら流れてなほもたのまるかな」（『古今集』七九二、紀友則）あたりから見えると思う。○七のやしろのみつのひかり 日吉山王権現社（今の天津市坂本にある日吉大社）で、属する本社・撰社・末社の二十一社を、七社ずつ上・中・下の三つに分けていたところから、「七のやしろの三つの」という言い方をしたのであろう。「ひかり」は、神の威光で、ここでは神慮を示すものとして言われているようである。なお、「みつのひかり」は、「瑞の光」を掛けたとも見られる。その場合「瑞の」は美称で、「みづの広前」（『後拾遺集』一一七三）などの用例がある。

【考察】左右で題が異なる。左の歌は「遇不会恋」の題で、永らえてまた会おうとどうして思ったことか、浅い会う瀬があったに過ぎぬのに、との心を、川の流れに寄せて詠んでいる。この詠み様は、古歌によったことが考えられる。初めの一・二句「ながれてとなにおもひけん」は、次の『後撰集』の歌の一・二句を用いた可能性がある。

ながれてとなにたのむらん涙河影見ゆべくも思ほえなくに（『後撰集』六五七、よみ人しらす）

また三句以下の「かち人のわたれどぬれぬ逢せばかりに」は、次の『伊勢物語』の歌によったかと思われる。

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば またあふ坂の関はこえなむ（『伊勢物語』六十九段）

それで左歌は恋の心を川の流れに寄せて詠んだ結果、縁語として「流

れて「かち人」「渡れど」「濡れぬ」「瀬」などの語を並べている。歌の隅々まで細かく目配りをした作という感じがする。

右の歌は「寄神祇祝」の題で、「君が世」の「万世」の栄えは、二十一の社の神慮にあるものだと言っている。二十一社は、歌の作者慈円の住んだ比叡山延暦寺を守護する日吉大社の中心をなすもので、その神意が「君が代」の長い栄えを支持しているというのであろう。この右歌の詠み様は、左歌に感じられる表現の細部まで心を配った詠み様と異なり、思うままを一気に述べたようなところがあるのではないか。左右二首の勝負は、判者も左右の方人も、ともに右勝とする点で一致したと記される。

三十二番 遇不会恋 左持

63 うらみわびまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空

右

丹後

64 忘れじのこの葉いかになりぬらんたのめしくれば秋風ぞふく

左右たがひよろしきよしを申す。判者、両首共心辨書難從以優也。勝負さ

だめ申すに不_レ及。

【通釈】

三十二番 遇不会恋 左持

63 恨みに耐えかね、もう待つまいと思う身だけれど、待つのに慣れてしまった、この夕暮の空よ。

右

寂蓮

右

丹後

64 忘れまいと言った、あの人の言葉は、どうなったのであろう。約束

した夕暮、(飽きたか人は来ず、)秋風がむなしく吹いてくる。

左右の人々が、互いにそれぞれの歌が佳作であると言う。判者は、

【注】○うらみわび 恨みに耐えかね。この「わび」は、「思ひわび」

「恋ひわび」などと同様、複合動詞に用いた用法で、「……することに耐えきれず」の意。

【考察】左右ともに「遇不会恋」の題の歌。左の歌は、再度の訪れがない恨みに耐えず、あきらめようと思うが、夕暮になると、待ち慣れた身はつい待たれて空を見る、といった心であらうか。待つ女の立場で、恋する身をいとおしむ心を詠む。

右の歌は、この前、忘れまいと言った人の言葉はどうなったのか、約束の夕暮に訪れはなく、秋風がむなしく吹いてくる、と詠む。「秋風」の語は「飽き」を響かせているのであろう。

左右の方人たちは、互いに歌が「よろしき」由を言ったようで、判者として俊成は、ともに「優」と評価し、持としている。

【備考】三十二番左歌は、『新古今集』(二二〇二)に収められている。また右歌も『新古今集』(一一三〇三)に(尊経閣文庫本等では第三句「なりにけん」の形で)収められている。

三十三番 左勝

65 あひ見しは昔語りのうつつにて其かねごとを夢になせとや

右

内大臣

66 人ごころほどは雲居の月ばかり忘れぬ袖のみみだとふらむ

判者云、右の歌よろしくきこゆれど、猶左はまさるべし。

【通釈】

三十三番 左勝

65 あなたと会った夜のことは、昔話ながら現実で、その時の(また会

う)約束を、夢と思えと言われるのですか。

右

定家朝臣

66 あの人の心は、空の月ほど隔たりりましたが、その月ばかりは、(あの人を)忘れかねて流す私の袖の涙に來て宿るでしょう。

判者が言うのに、右の歌も結構に思われるけれど、やはり左の歌の方が勝るであらう。

【注】○あひ見し「あひ見る」は、男と女が契りを結ぶ意。○昔語りのうつつ 昔話に属するが現実のこと。○かねごと 約束の言葉。○

雲居 くもる。空。遠い存在として言う。

【考察】左右ともに「遇不会恋」の題の歌。左の歌は、二人が契りを結んだのは、昔話のようでも「うつつ」、現実のことなのに、その折また会う約束をした言葉を「夢」と思えと言うつもりかと、相手を恨み嘆く心である。「うつつ」と「夢」の語を上手に織りこんだ二首であろう。右の歌は、恋の相手の心は、空の月ほど遠く離れてしまったが、その月だけは、自分の袖の涙に来て宿ることであろうと詠んでいる。相手の心が自分から遠く離れた様子を「ほどは雲ゐの月」などと表現しているが、これはその言葉から見て、次の古歌を本歌にしたと思われる。

忘るなよほどは雲ゐになりぬとも空行く月のめぐりあふまで（『拾遺集』四七〇、橘忠幹。『伊勢物語』十一段）

判者として俊成は、右の歌も「よろしく」思われるが、左の歌が勝るとしたという。

【備考】三十三番左歌は、『新古今集』（二二九九）に収められている。

三十四番 左勝

67 しばしこそぬよあまたとかぞへても猶山のはの月を待ちしか

右

具親

68 なかなかに又たのまるる世なりけりかかるべしとは契りやはせし

左方申云、右歌宜しといへども、題においては左歌尤可勝歟。判者同之。

【通釈】

三十四番 左勝

内大臣

67 訪れない夜が重なった（ので、もう待つまいと思つた）のですが、しばらくは、山の端の月を待つ体で、人を待ったのです。

右

具親

68 むしろ頼もしくも思われる、二人の仲です、——このように別れるとは約束しなかった（から、いずれ会えると思う）ので。

左方が言うのに、右歌も結構な作だが、題意を生かす点では、左の歌が当然勝となるうかとのことであつた。判者もこれと同じ意見であつた。

【注】○こぬよあまた 訪ねて来ない夜が多く重なること。「たのめつこぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる」（『拾遺集』八四八、人麿）○山のはの月を待ちしか 「あしひきの山よりいづる月待つと人には言ひて君をこそ待て」（『拾遺集』七八二、人麿）などの歌によれば、山から出る月を待つのを表向きの理由にして、恋人の訪れを待つことを言う。○世 ここでは男女の仲を言う。

【考察】左右ともに「遇不会恋」の題の歌。左の歌は、「注」でも触れたように、複数の歌の言葉をとり入れて詠んだかと思われる。まず「こぬ夜あまた」の語は、次の歌からとり入れたものであろう。

たのめつこぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる（『拾遺集』八四八、人麿）

左歌は、この歌をいわば背後に置くことによつて、「こぬ夜あまた」になつた恋の相手を「待たじと思ふ」心も含むことになる。

また左歌の「山のはの月を待ちしか」という語句は、次の歌などからとり入れたものであろう。

あしひきの山よりいづる月待つと人には言ひて君をこそ待て（『拾遺集』七八二、人麿）

左歌は、この歌を背後に置くことで、「山よりいづる月待つ」と称して、実は「君をこそ待て」と、山上に出る月を待つようなふりをして本心は恋の相手の訪れを待つ心を示したと思われる。なおこういう発想の歌は、ここに引いた『拾遺集』の歌以前に、『万葉集』の歌（三三九〇長歌末尾）などに見られ、発想として古い伝統をもつ。

それで左歌は、古歌二首をいわば背景に置くことで、やや複雑な内容を詠み入れていることになる。その大意は、「通釈」に記したようなことかと思う。

右の歌は、左の歌と比べると、より単純な詠み様のようである。

左右の歌の評価については、左方から、題意を生かした点で左歌が勝るとの意見があり、判者もこれと同じ見方をとった旨が記されている。

【備考】三十四番左歌は、『統古今集』(二三〇)に収められている。右歌は『新統古今集』(一五五二)に、第四句「かはるべしとも」の形で収められている。

三十五番 左

権中納言公継

69 たえぬるはわがこころともいひつべし涙をとはいいかかこたへむ

右勝

公経

70 あはれなる心のやみのゆかりとも見しよの夢をたれかさだめん
右歌殊に可勝之由、左右たがひに申之。判者同之。

【通釈】

三十五番 左

権中納言公継

69 訪れが絶えたのは、私の心のせいとも言えるでしょう。でも涙のわけを問われたら、どう答えたものでしょうか。

右勝

公経

70 あなたと会った夜の夢のようなことを、このあわれ深い恋心の迷いの闇につながると、だれが決められるでしょうか。

右の歌は特に勝るであろうと、左方も右方も言う。判者もこれと同意見であった。

【注】○心のやみ 恋心による心の迷いを、ここでは言うのであろう。

この語句を用いた古歌は「考察」の項に挙げる。なお下句の「夜」「夢」と縁語になる。○見しよの夢 恋の相手と会った夜の夢のようなこと。

【考察】左右ともに「遇不会恋」の題の歌。例によっていずれも女の立場での作である。左の歌は、訪れが絶えたのは、私の心によるとも言えるが、つい流す涙の理由を問われたら、どう答えたものかと詠む。訪れが絶えたのを悲しむ心である。

右の歌は、恋におちて理性を失った心の状態を、「心のやみ」と言い、

それにつながるごととして、「見し夜の夢」、二人が会った夜の夢のようなことがあると、「たれかさだめん」と詠んでいる。だれが定めることができるだろうか、という言い方だが、結局は、恋の相手以外には定められる人はないという心であろう。

この右歌は、用いられた語句から見て、次の古歌を本歌としたと思われる。

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ(『古今集』六四六、在原業平。『伊勢物語』六十九段)

この本歌を背後に置くことで、右歌はその奥行きを深めているところがあるかと思う。

左右の方人はともに右歌を勝るとし、判者も同じ見方をとったと記されている。

【備考】三十五番右歌は、『新古今集』(二三〇〇)に収められている。

三十六番 左勝

通具朝臣

71 契りきやあかぬわかれに露おきし暁ばかりかた見なれとは

右

宮内卿

72 うらみてもぬるる袖かななき名のみをじまの磯の蟹ならねども
左申云、右歌、遇ひてあはぬ恋のころ、おぼつかなし。判者云、以左可為勝。

【通釈】

三十六番 左勝

通具朝臣

71 約束したでしょうか、——飽きもせぬ別れに(涙の)露が袖に置いた、あの暁だけが二人の恋の形見であれとは。

右

宮内卿

72 恨めしく(涙で)袖がぬれます、——あらぬうわさばかり立つ身の、名も惜しまれて、雄鳥の磯の海人ではないのですが。

左方が発言して、右の歌は、「遇ヒテ逢ハザル恋」という題の心が明らかでない、と批判した。判者の意見は、左の歌を勝とすべき

だ、ということであった。

【注】○契りきや ちぎりきや。約束したか。反語の言い方で、恋の相手に問いかけた心。○露おきし 涙の露が袖に置いた意であるが、庭前に露がおいたことも併せて言っているか。○かた見なれ (恋の) 形見であれ。○をじま 雄島をしま。陸奥の歌枕。今の宮城県の松島湾の内にある島。ここでは「名のみ」に続けて「惜しまれ」の心も示すと見たい。○蟹 あま。漁師。

【考察】左右ともに「遇不会恋」の題の歌で、女の立場での作である。左の歌は、飽かぬ別れに涙したあの暁だけを恋の思い出にしようよと、あの時「契りきや」、約束したでしようかと詠む。別れた相手が忘れ難く、また会うことを求める心であろう。

右の歌は、浮き名ばかり立てられて名も惜しく、「雄島の磯のあま」ではないけれど、恨めしさに涙で袖がぬれると詠む。「雄島の磯のあま」は、次の歌によつたのであろう。

松島や雄島の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか (『後拾遺集』八二七、源重之)

この右歌については、落題かと左方から指摘があり、判者も左歌を勝としている。

【備考】三十六番左歌は、『新古今集』(一三〇一)に収められている。

○作者略伝

作者の配列順序は、この歌合で初出の歌の見える順序に従った。
アラビア数字は、歌番号を示す。
〔〕内は歌に添えられた作者名。

- 1 15 (内大臣) 通親 みちちか 源通親。内大臣雅通の子。正二位内大臣
- 29 33 臣に至る。『高倉院厳島御幸記』等の作も残す。一一四九―一二
- 43 51 〇二。
- 65 〇二。
- 2 18 (女房) 後鳥羽院 ごとばいん 高倉天皇の皇子。第八十二代の天
- 36 42 皇。一一九八年讓位後院政を行なう。一二二一年、承久の乱に
- 50 56 敗れ、出家、隠岐に流された。歌壇では中心的存在として『千
- 60 五百番歌合』や『新古今集』を完成させた。家集は『後鳥羽院

御集』。歌論『後鳥羽院御口伝』も残る。一一八〇―一二三九。

3 9 (左大臣) 良経 よしつね 藤原良経。関白兼実の子。従一位摂政

17 25 太政大臣に至る。和歌所寄人になり、『新古今集』仮名序の筆者。

41 53 家集は『秋篠月清集』。一一六九―一二〇六。

67 公経 きんつね 藤原公経。内大臣実宗の子。従一位太政大臣に

4 至る。一一七一―一二四四。

5 7 寂蓮 じゃくれん 俗名は藤原定長。俊成の弟の醍醐寺の阿闍梨

45 63 俊海の子で、俊成の養子。従五位上中務少輔になった後一一七

二年ごろ出家。和歌の方面では、『新古今集』の撰者の一人にも

なるが、撰進前に死去。家集は『寂蓮法師集』。一一三九ごろ―

一一〇二。

6 34 定家 さだいえ 藤原定家。皇太后宮大夫俊成の子。正二位権中納言

46 54 に至る。和歌所寄人になり、『新古今集』撰者の一人。また『新

66 勅撰集』の撰者。『近代秀歌』『詠歌大概』等の歌論歌学書も残

した。家集は『拾遺愚草』。一一六二―一二四一。

8 16 慈円 じえん 俗姓は藤原。関白忠通の子で、良経の叔父に当た

26 32 る。比叡山に入って出家し、大僧正、天台座主になった。『愚管

40 62 抄』の筆者。歌人としても活躍し、『新古今集』には西行に次ぐ

数の歌を残す。家集は『拾玉集』。一一五五―一二二五。

10 14 雅経 まさつね 藤原雅経。刑部卿頼経の子。従三位参議になる。

38 和歌所寄人になり、『新古今集』撰者の一人。家集は『明日香井

和歌集』。一一七〇―一二二一。

11 19 有家 ありいえ 藤原有家。太宰大貳重家の子。従三位大藏卿に

なる。和歌所寄人になり、『新古今集』撰者の一人。一一五五―

一一二六。

12 58 宮内卿 くないきょう 右京権大夫源師光の女。後鳥羽院の女房。

72 生年未詳―一二〇五ごろ没か。

13 23 通具 みちとも 源通具。内大臣通親の子。正二位大納言に至る。

31 71 和歌所寄人になり、『新古今集』撰者の一人。一一七一―一二二七。

- 20 讃岐 さぬき 源三位頼政の女。二条天皇に仕え、二条院没後は藤原重頼の妻となり、建久年間に後鳥羽天皇の中宮任子に出仕後、出家。家集は『二条院讃岐集』。生年未詳―一二一七ごろ没か。
- 21 隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経（寂超）の子。母の美福門院加賀は、のち俊成の後妻になった人。正四位下右京権大夫になる。似絵の大家とされた。家集は『隆信朝臣集』。一一四二―一二〇五。
- 22 48 範光 のりみつ 藤原範光。刑部卿範兼の子。従二位民部卿兼春宮権大夫に至る。一一五五―一二一三。
- 24 70 公経 きんつね 藤原公経。内大臣実宗の子。従一位太政大臣に至る。一一七一―一二四四。
- 27 69 公継 きんつぐ 藤原公継。左大臣実定の子。従一位左大臣に至る。一一七五―一二二七。
- 28 64 丹後 たんご 藏人大夫源頼行の女。源頼政の姪。初め九条兼実としまりに、のちその女の任子（後鳥羽院中宮、宜秋門院）に仕えた。生没年未詳。
- 30 兼宗 かねむね 藤原兼宗。内大臣忠親の子。正二位大納言に至る。一一六三―一二四二。
- 35 47 枳阿 しゃくあ 俗名は藤原俊成。権中納言俊忠の子。はじめ葉室としまり頼の養子になり、名を顕広と言ったが、のち本流に復して俊成と改名。正三位皇太后宮大夫に至る。一一七六年出家、法名は枳阿。多くの歌合の判者を務め、歌壇の指導者として広く認められた。『千載集』の撰者。家集は『長秋詠藻』。歌学書『古来風体抄』等を残す。一一一四―一二〇四。
- 37 保季 やすすえ 藤原保季。従三位重家の子。叔父季経の猶子。従三位左馬権守になる。一一七一―没年未詳。
- 39 55 越前 えちぜん 大中臣公親の女。後鳥羽院の母七条院殖子、後鳥羽院の皇女嘉陽門院礼子に仕えた。生没年未詳。
- 44 家長 いえなが 源家長。大膳亮時長の子。従四位上但馬守になる。また和歌所開闢かいてくとして『新古今集』撰進の事務に当たった。生年未詳―一二三四没。
- 49 季保 すえやす 賀茂季保。神主重保の子。従四位下、賀茂社司になる。生没年未詳。
- 52 忠良 ただよし 藤原忠良。摂政基実の子。正二位大納言に至る。一一六四―一二二五。
- 59 家隆 いえたか 藤原家隆。権中納言光隆の子。宮内卿などになり、従二位に至る。また和歌所寄人で、『新古今集』撰者の一人。家集は『壬二集』。一一五八―一二三三。
- 61 長明 ながあきら 鴨長明。鴨御祖神社禰宜長継の子。和歌を俊恵ちようめいに学び、和歌所寄人にもなったが、一二〇四年出家し、大原や日野に住む。『方丈記』『無名抄』などを残す。家集は『鴨長明集』。生年未詳―一二一六。
- 68 具親 ともちか 源具親。右京権大夫師光の子。従四位下左近少将になる。生没年未詳。